

五輪前のスポーツを通じた「社会的促進」

近田 亮平

●はじめに

南米初の夏季五輪とパラリンピック（以下、五輪）を開催するブラジルのリオデジャネイロ（以下、リオ）は、岩のような山々が海近くまで迫った美しい景観や多くのビーチを有し、「世界の三大美港」のひとつに数えられる国際的な観光地として有名である。またリオは、一九六〇年にブラジリアへ遷都されるまで長きにわたりブラジルの首都として、政治経済だけでなく文化的にも発展してきた。これらリオの「文化的景観」が評価され、二〇一二年に「山と海に囲まれたカリオカ（リオ市出身の人）の景観」としてユネスコの世界遺産に登録された。

気候が温暖なリオでは、一年を通してビーチや公園がリクリエーションの場として活用できることもあり、娯楽や健康促進を目的としたスポーツの実践が盛んに行われている（写真1）。その一方、山や丘の急な斜面に多く形成されているために可視的で、訪れる人々の目に強烈な印象を与えるファヴェーラ（不法占拠を起源とするスラム街）に象徴されるように、リオは貧富の格差や改善しない治安など多くの社会問題を抱えている（写真2）。なお、二〇一五年の人口が推定で約六五〇万人とされるリオ市には、五〇〇以上ものファヴェーラが存在し（ブラジル地理統計院）、そこには約二〇〇万人もの人々が居住しているとされる（参考文献①）。

●スポーツを通じた「社会的促進」の試み

これらリオに特有ともいえる諸要素から、スポーツや文化的な活動を通じた貧困層の「社会的促進」(social promotion)の試みが、政府やNGOにより活発に行われている。「社会的促進」とは心理学においてオールポートが提唱した概念で、集団で同じ作業をすることで共同行動者の存在が刺激となり、個人で作業を行うよりも達成効果が促進される現象を意味する（参考文献②）。本稿では、筆者が二〇一六年四月下旬から五月はじめにリオで行った調査をもとに、リオにおけるスポーツなどを通じた社会的促進の状況について、「五輪村」(Vila Olimpica)と呼ばれる市政府によるプロジェクトを中心に紹介する。

リオにおける政府による社会的促進の試みは、主に州政府と市政府のものに大別できる。残念ながらリオの治安状況は劣悪なことで世界的に知られており、その関係からまず州政府の施策である常駐治安維持部隊（UPP）について取り上げる。リオのファヴェーラには麻薬や犯罪組織の支配下にあるため、警察や政府も立ち入ることが難しいものも存在する。UPPは、そのようなファヴェーラの内部に日本の交番のような警察の拠点を設置し、武装化した警官が常に駐在して周辺コミュニティの警備やパトロールを行うことで、治安の回復や犯罪組織の撲滅を実現しようとする試みである（写真3）。UPPは二〇〇八年にリオ市中心部に初めて設置された後、二〇一六年時点で四二拠点にまで



写真1 リオでは健康促進のためのトレーニング器具が備えられた公園がある（筆者撮影）



写真3 リオ市北部にあるファヴェーラ「コンプレクソ・ド・アレマン」にある常駐治安部隊 UPP (筆者撮影)



写真2 コパカバーナ地区の丘の斜面に形成され、一般の住宅地やビルと隣接している「カンタガーロ」ファヴェーラ (筆者撮影)

増設され、約一万人の警官がUPPに従事している(リオ州政府サイト)。

UPPはその目的であるファヴェーラをはじめとした貧困層居住区での治安回復を達成すべく、警官と地域住民との日常的なコンタクトや信頼関係の構築が積極的を試みられている。その具体的な施策に、地域在住の子どもたちに警官が柔道などのスポーツを教えた、子どもたちが自由に本を読んだり遊んだりできるようUPPの一室を開放したりするものがある。

なお、日本政府もUPPの活動に協力しており、二〇一六年三月六日には柔道全日本男子の井上康生監督がUPPの運営する柔道教室を訪れ、畳八〇枚や柔道着一〇〇着を寄贈している。

●リオ市政府の「五輪村」

一方、リオ市政府による社会的促進の主な施策として、市内の貧困層居住区に建設されている「五輪村」が挙げられる。五輪村は、主に貧困層居住区の住民を対象に施設を無料で開放し、スポーツなどの活動を行うコミュニティ・センターのような存在である。この五輪村のひとつに「ガンボア五輪村」(Vila Olimpica da Gamboa)

があり、筆者は調査でリオに滞在した際、同五輪村を訪問した。二〇〇七年にリオ市で開催されたパンアメリカン競技大会を契機に、ガンボア地区を含む市内の貧困層居住区に五つの五輪村が設置され、その後、市内の別の地区にも増設されていった。五輪村の規模や活動の内容は各々異なり、大規模な五輪村では公立学校が併設されているところもある。筆者の訪問に対応してくれた市政府職員でガンボア五輪村のコーディネーターであるルシアノ氏によると、市内に現在二二カ所の五輪村が存在する。

ガンボアはリオ市の中心街に近い港湾地域に位置し、貧困層が多く住む地区である。リオで最初に形成されたと言われるファヴェーラ「プロビデンシア」。「フォトエッセイ」の最後にて、二本のロープウェイのうち運行されていなかったところ)のすぐ近くにある(写真4)。ガンボアを含む港湾地域は、五輪を契機に再開発が進められているが、五輪決定前は港沿いで倉庫が多いことに加え高架橋の幹線道路が通っていたため通常でも人通りが少なく、特に夜は治安が悪

い地域であった。再開発に指定された港湾地域の一部でありライト・レールのVLT(本号所収の浜口稿・フォトエッセイ参照)も走行する予定であるが、ガンボア周辺では現在でも外国人や観光客の姿をみることはほとんどない。

ガンボア五輪村では主に周辺住民を対象として、様々なスポーツなどの活動が無料で実施されている。同五輪村のメインコートではサッカー、バレーボール、陸上競技など(写真5)、建物のなかでは柔道や卓球など、施設内にはプールもあり水泳や水中エアロビなどが行われている。また、サンバやバレエ(写真6)などのダンスに加え、音楽などの文化的な活動や、障害者や高齢者を対象として



写真4 ガンボア五輪村と同五輪村で勤務するリオ市政府職員のコーディネーター Luciano Barro 氏 (筆者撮影)



写真5 ガンボア五輪村でのバレーボールの練習 (Luciano Barro 氏撮影)



写真6 ガンボア五輪村でのバレエ教室 (Luciano Barro 氏撮影)

ヨガやストレッチなど健康を促進するような活動も行われている。さらに、スポーツを中心に文化や社会福祉的な要素を取り入れたイベントを定期的に開催している。ただし、参加できる活動は一人三つまでとなっている。ガンボア五輪村の通常の活動は火曜日から土曜日まで、週に二回、医師の診断も受けられることになっている。

同五輪村の利用者は主に地域住民だが、登録すれば周辺地域外の人や外国人など誰でも施設を利用することができる。利用者の年齢層は多岐にわたるが、学校の授業が午前中の半日に行われることが

多かった。ガンボアのような五輪村が市内に二カ所あるため、各五輪村の規模の大小はあるが、全施設の毎月の利用者はおおよそ四万人と考えられる。

五輪村の管理運営はリオ市政府のスポーツ娱乐局が担当しており、各五輪村に職員が派遣され職務に当たっている。ガンボア五輪村では、二二名のインストラクターと一八名の管理部門を合わせ四〇名の市職員が勤務しており、五名前後のインストラクターがボランティアとして参加している。五輪村は、前述の州政府の施策であるU P Pとも共同で社会的促進の活動

多いため子どもたちは主に午後五輪村を利用し、午前は成人、特に高齢者の利用が多いのである。また、ガンボア五輪村の利用者数は毎月約二〇〇〇人で、延べ数では約八〇〇〇人にと

行っており、また、ナイキなど主にスポーツ関連の民間企業からも市職員の研修や資金に関して支援を受けている。

五輪村のインパクトに関してコーディネーターのルシアノ氏は、犯罪組織に巻き込まれることの多いガンボア地区の青少年が、五輪村が建設されたことで麻薬や暴力よりスポーツや社会福祉に関心を持つようになったと述べている。また、一例ではあるがガンボア地区在住の少年で、五輪村での活動に多く参加したことをきっかけに社会的促進に関心を抱き、現在はボランティアとして五輪村のスタッフになっている人もいるとのことだった。

●五輪を直前に控えたリオ

五輪を直前に控えたリオでは、五輪村やU P Pなどを拠点としてスポーツを通じた社会的促進の試みが行われている。しかし、五輪の影響について研究しているリオ連邦大学のオルランド・ジュニオール教授は、今回の調査で筆者が行ったインタビューのなかで、五輪開催に関する社会分野の重要性や関心は非常に低いと述べている。その理由として、近年における五輪の商業主義化に加え、最近のブラジルの政治経済的な混乱により資金だけでなく、五輪をどのように開催・活用するかを考える余裕がなくなり、社会分野に関しては「負の投資」を行っている点を挙げていた。同教授も関わった研究は、経済開発、スポーツと治安、住居と交通インフラ、都市行政を五輪開催のポイントとして挙げている(参考文献③)。しかし、最近のブラジルは景気低迷と政府の統治能力の低下が指摘されており、これらが五輪開催にネガティブな影響を与えてしまったといえよう。

また、パラリンピックとの関連から障害者を対象としたバリアフリー化について、今回のリオでの視察調査では、地下鉄の駅などでエレベーターの設置が進んでいる状況を理解できた(写真7)。しかし、それ以外に障害者を対象とした施策などをリオの街で目にすることはなかった。たとえば、リオの歩道は立方形に近い小さな石を敷き詰めたものがほとんどで、それがリオの街を象徴する景観となっているが、このような歩道の表面は凹凸が多く、また、敷き詰めた石が抜けて穴ができているところもよくみかける。したがって、



写真7 リオ市中心街でパラリンピックに向け設置工事が行われている障害者のためのエレベーター（筆者撮影）

歩道という一例ではあるが、障害者が安全かつ安心に歩行できるような環境が整備されているとはいえない。

最後に、スポーツを通じたものではないが、五輪を通じて社会的な変化が期待できる事例を紹介したい。それは五輪が二〇一六年のリオから二〇二〇年に日本の東京へ引き継がれることと関連している。二〇一六年四月二七日から二週間、リオ市のマリリア・デ・ジルセウ公立小中学校において、次の五輪開催国である日本に対する関心を高めてもらうことを目的に、

日本の象徴である富士山の写真展が開催された（写真8）。

同学校の生徒の多くは写真2のファヴェーラ（カンタガロ）に住んでおり、彼女たちは決して裕福な家庭出身ではなく、日本に関する知識や関

心を多く持つてはいない。同校の生徒たちのようにリオのファヴェーラに住んでいる子どもたちにとって、地球の反対側にある日本、そして、その象徴である富士山はまさに遠くて遠い存在であろう。筆者は同写真展の開幕式を視察した。そこでは集まった一〇〇人ほどの生徒に対して、富士山だけでなく俳句などの日本の文化や歴史が紹介される一方、同校の生徒たちがブラジルのダンスを披露するなど、五輪を契機としたブラジルと日本双方の交流が行われた。ファヴェーラで生活する人々の状況や日々接する情報、そして、リオはサンパウロなどと比べて日系人や駐在などの日本人が非常に少ないことを考えると、今回の学校内での富士山の写真展はカリオカである生徒たちにとって、自らの限られた生活空間から外に目を向け、社会をより広く捉える良い機会になったと考えられよう。

●おわりに

本稿では筆者による現地での調査をもとに、リオ市政府の五輪村プロジェクトを中心に、五輪を前にしたリオにおけるスポーツなどによる社会的促進の状況を紹介し

た。五輪村は数量的に小規模なプロジェクトであり、最近のブラジルの政治経済的な混乱もあり、その効果は限定的かもしれない。しかし、リオにおける貧困層を主な対象とした社会的促進の試みは、五輪に出場するまでの選手の育成の土壌となっている。たとえば、今回の五輪に出場する女子柔道のラファエラ・シルヴァ選手は、映画『シテイ・オブ・ゴッド』（二〇〇二年）の舞台となったファヴェーラの出身で、二〇一三年の世界選手権で優勝したこともありリオ五輪でのメダル獲得が期待されている。

五輪を目前にしたブラジルは政治経済的に大きく低迷し、筆者が現地に滞在した時期には大統領の弾劾審議が進んだこともあり、五輪に対する国民の関心は決して高くなかった。しかしブラジルの選手、特に「五輪村」などの社会的促進プロジェクトの恩恵を受けた選手がリオ五輪で活躍すれば、お祭り好きなブラジルの人々は大いに盛り上がるであろう。リオの次の五輪が開催される東京で、元氣を取り戻したブラジルからの選手や人々の笑顔が多くみられるよう願うばかりである。

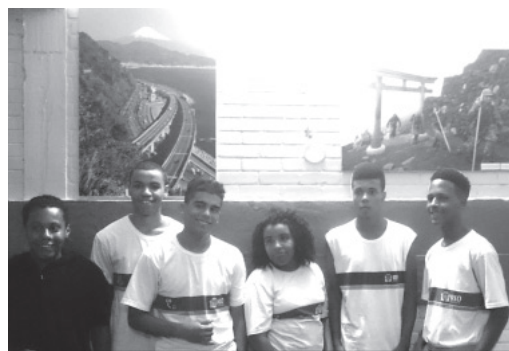


写真8 リオ市マリリア・デ・ジルセウ公立小中学校で行われた富士山の写真展（筆者撮影）

（こんた りょうへい／アジア経済研究所 ラテンアメリカ研究グループ）

《参考文献》

- ① Renato Meirelles and Celso Athayde, *Um país chamado Favela*. São Paulo: Gente, 2014.
- ② Allport, Floyd H., *Social Psychology*, Boston: Houghton Mifflin, 1924.
- ③ Castro, Demian G. et al., *Rio de Janeiro: os impactos da Copa do Mundo 2014 e das Olimpíadas 2016*, Rio de Janeiro: Letra Capital, 2015.